

新聞記事「就学の喜び 障害者に今」に寄せられた感想など

10/7付けの河北新報の記事「就学の喜び 障害者に今 ～ 79年以前、学齢期に義務教育受けられず…～」を目にしたメル友から、感想等をいただきましたので、厚かましいですが紹介します。

記事は、最後のページに貼付してます。

ふと思うに、仙台には東北大、宮教大を始めたくさんの大学の障害児・者関係の先生方がいるのに、また、現職を退き10年も立つのに、取材対象に推してくれた方がいることに感謝しています。

また、記事を見てこうして感想、コメントをくださるメル友にも感謝しています。

2012. 10. 14.

阿部幸泰

①就学猶予対象だった方々に訪問教育が行われていたことを初めて知りました。(勉強不足ですみません…)

(しかも私の出身の秋田は行ってないんですね。)

阿部先生の記事にあったように、障害のある方々にとっての教育のメリットと、学校や教師の視野を広げるメリットの両方があると思いました。

「学校」の良さは、意図的な場面に、意図しない人や心の交流や活動が加わり、いきいきとした時間を共有できることかな、と思っています。

子どもに限らず、人は必要なこと(楽しいこと)を自分で学び取っていくのだと思いますので、学ぶことに年齢は関係ありませんよね。

(私も再び学生になって、改めて「学ぶ」という刺激は「楽しい」ことだと再認識しています!)

また、教員にとっても、目の前の子どもたちの毎日を考えることに終始してしまいがちですので、こうした機会から生涯教育、生涯発達支援について学ばせていただき、担当している子どもたちの将来と重ねて考えいかないといけない、と思いました。

特別支援教育の根底にある、「場」による教育ではなく、「一人一人のニーズに応じる」という考えを、生涯発達支援にも広げていかなければいけませんね。

親御さんがご高齢になられている現実も、先生の授業のお話を思い出しながら読ませていただきました。

親御さんの絶え間ないご努力があって、こうした取組が可能になっていますよね。

本当に頭が下がります。

教育の機会が、ご本人とご家族の生き甲斐やあたたかい話題のひとつになっていることを、関係者はきちんと評価し、次につなげていくことが、親御さんからバトンを受け継ぐことになりますね。

とても勉強になりました。

記事は印刷して、クラスのみんなに紹介し、掲示したいと思います！

②記事、載っていたのを今日、読みました。

教育ってすごく人を豊かにするものだと、改めて感じました。

どこかに通って、いろいろな人に出会って、いろいろな刺激を受けることで、どんな時期でも、人は成長する。

そして、阿部さんらしいと思ったのが、教諭の発信の部分。

いいことをしていても、まとめて発信しないと、つながっていかないというですかね？

よく阿部さんは発信！っておっしゃいますものね。

③ずっと重症心身障害者に関わってきた実績は、誰もが認めるところなんですねえ～。

感服しました。

これからもずっと皆さんの力になって支援してあげてくださいね。

④河北新報の記事を拝見しました。

改めて貴君のこれまでライフワークというか障害者教育に携わった人生に敬意を表します。

私などとは全く違う人生を過ごした友を改めて尊敬します。

貴君の生き方、誇りに思います。

⑤重い障害があるといわれる人こそ、長い期間の教育的係わり合いが必要なのだと思いますし、足○病院をお邪魔していてもそのことを実感します。

また、こうした記事を目にするときにいつも頭に浮かぶのは○子さんのことです。

つくづく私の今の仕事の源流には○子さんとの係わり合いがあって、実に多くのこと学ばせていただいたと思います。

いまでも生きていたら就学していたのかな、と想ったりもします。

⑥記事を拝見しました。

コメントが記事に載って良かったですね！！

まさに、コメントの通りの事が必要ですね。

「係わり手が相手を理解する事」、「実践した事を公に発信する事」こそが新たな一步に繋がるのかもしれませんが。

私も学齢超過者に係わっている人に負けず、実践を積み重ねて、力をつけていきたいと  
思います。

⑦新聞記事見ました。

宮城県の先駆的な活動素晴らしいです。

阿部先生はじめ皆様の長年の活動の成果ですね。

⑧河北の記事の幸泰さんのコメント、とても良かったです。

スタッフにも回し読みをしています。

⑨河北新報の記事、早速ラミネートして事務所に掲示させていただきました。

⑩新聞記事、良かったです。

不自由な人の為、ますます頑張ってください。

⑪新聞記事、拝見しました。

登校に至るまでの皆様のご苦勞と共に、登校された皆さんの笑顔、新聞で拝見していても素敵でしたね。

阿部さんが、以前教えて下さったように行政の隙間を縁の下で支えておられる皆さんの発信、当事者、家族の想いの発信、こうした発信を継続することで初めて行政等の支援に繋がり、笑顔の輪が広がっていくという事に気付かされます。

阿部さんが、記事でお話しされている様に集団の中で育み合うことの大切さ、本当に日々実感しています。

○太が、お世話になっいる教育大学・療育教室の先生も、良くお話しされています。

安心できる仲間との集い、集団の中で育みあうことの大切さ、○太は教室の中では最年少で、グループの中では一見難しい様な事が多いのですが、○太なりに周囲を意識したり、その中でできる事をチャレンジしようとする仕草を見せたり、一見すると見逃しそうな様子を先生が気づいて本人を誉めて私たちに誉めてあげてねと○太の様子を知らせてくれたりと、集団の中での心地よさを本人が実感してくれているのが嬉しいです。

阿部さんが、お話しされているように、皆さんの支えで素敵な場が芽生えたので、是非、ご本人が嬉しい想いを発信されてするのを気づいて、また実践の過程等を発信して活動の広がりにつけてくださればと願ってしまいます。

⑫お世話になっております。このたびは取材にご協力いただき、まことにありがとうございました。

学齡超過問題については、恥ずかしながらほとんど知識がありませんでした。そのような中で、示唆に富むお話をしていただき、大変勉強になりました。

今回の取材をきっかけに、重症心身障害者のみなさんの声に耳を傾けていけたらと考えております。

現場で起きていることを発信することは、新聞の大切な役割でもあると思いますので、継続して重症心身障害児・者のみなさまの現状を伝えていけたらと考えております。

今後も、なにとぞよろしくお願いいたします。

# 就学の喜び 障害者に今

## 宮城

養護学校(現特別支援学校)が義務教育化された1979年の時点で学齢期(6~15歳)を過ぎていたために教育から取り残されていた重症心身障害者の就学が、宮城県でも昨年度始まった。教育の機会均等を求め続けた保護者の声を受けて、県教育委員会がようやく扉を開いた。50歳を超えた人たちが通う教室を訪ねると、年齢に関係なく学びを楽しむ姿があった。

(生活文化部・安達孝太郎)

## 互いに刺激し前向きに

9月中旬の午後、仙台市青葉区に療育園が集まった。車椅子で集まった区療育園の医療型障害児入所施設エコタの1人は、療育園に入所している。療育園の一室で、宮城県立光小学校5年から中学2年の4人。明支援学校(同市泉区)の訪問。その中に、本年度、6年に編入



授業を受ける斎藤さん(左)と佐藤さん。2人とも、教室に通い始めて表情が豊かになったという

重症心身障害者の学齢超過問題 養護学校は1979年に義務化されたものの、既に学齢期を過ぎていた人は義務教育から取り残された。保護者の声を受けて、各都道府県教育委員会はそれぞれの判断で15年以上前に学齢超過者の受け入れを始めた。東北では岩手県教委が2004年度に受け入れを始め、青森県教委も本年度始めた。現在は秋田県教委だけが受け入れていない。義務教育から取り残されたままの障害者は、国は詳しい実態を把握していない。

斎藤さんは話すことができず、不自由な手や表情などで意思表示をする。牛坂教諭は斎藤さんの両親らと相談して、「物作りを通して手を動かす」「友達や教師と関わりながら、活動を楽しむ」などの1年の目標を立てた。

牛坂教諭は「この半年で手の動きがスムーズになり、自分の考えをしつかりと伝えるようになった」と話す。

斎藤さんと同じ教室で学んでいる佐藤さんの父(81)も娘の成長を実感している。「通学するようになって、人との接し方が柔らかくなってきた」と目を細める。

宮城県の学齢超過者の特別支援学校就学は40人程度となる見通しで、数年で希望者全員が学ぶことができる。対象者は小学6年を終えた後、中学3年に編入して、計2年間学ぶ。

この日の授業のテーマの一つは「秋を感じる」。生徒たちはそれぞれ担当教諭に車椅子を押し入れ、施設の庭に出た。植栽の観察をしながら、図工に使う葉を採った。

「この葉っぱ採りますか?」斎藤さんは担当の牛坂文枝教諭(47)の問い掛けにうなずき、助けを借りて元気よく葉を引っ張った。

斎藤さんは未熟児で生まれ、1歳になったときに脳性まひと診断された。養護学校が義務化された時点で20歳だったために小学校に入らなかった。宮城県教委は学齢超過者の入学を2011年度に認め、斎藤さんは6年を終えた後、中学3年に編入して、計2年間学ぶ。

今回、宮城県で就学の対象となる学齢超過者は40代後半~70代。学齢期を大幅に過ぎていたが、国立病院機構西多賀病院(仙台市太白区)の元指導室長で、障害者教育

阿部 幸泰さん

に詳しい阿部幸泰さん(67)は「重い障害があっても、何歳になっても、障害者教育の専門知識を持つ教師とかかわることによって生活を豊かにすることはできる」と語る。

## 「成果」教諭ら発信を

昨年から支援学校に通い始めた仙台市の60代男性は、ストローで水を飲むようになったという。阿部さんは「他の生徒から刺激を受けたのではない。集団の力、教育の力が表れたケース」とみる。

阿部さんはさらに、学齢超過者の就学にかかわった教諭らに対し、今回の成果を外部にきちんと発信することを求める。「個々の事例が重症心身障害者の生涯教育を考えるきっかけにつながるだろうし、障害者以外の教育にもヒントを得られるかもしれない」と話す。